

『幽夢影』の編集に關する一考察―書簡を手がかりに―

小塚 由博

はじめに

1. 張潮と『幽夢影』
2. 書簡に見られる『幽夢影』の編集状況
3. 書簡に見られる『幽夢影』の評語の編集状況
おわりに

はじめに

筆者はこれまで清初に江南において活躍した文人の張潮について、その文人交遊ネットワークが彼の作品にどのような影響を興えていたのかについて、友人たちとの間で交わされた書簡を一つの手がかりとして考察を重ねてきた。前号までで、彼の編纂した三種の叢書（『虞初新志』『檀几叢書』『昭代叢書』）が、それぞれどのようにして編纂刊行されて

いったのかについて調査した。¹ 張潮は、同時並行的に叢書の編集作業を行い、その過程において様々な文人たちとの繋がりが見られる。独自の書簡傳達網を巧みに利用しながら、掲載作品の収集・校正から、完成した叢書の贈呈等に到るまで様々な活動を行っており、書簡が出版活動を圓滑に進めるツールの一つとして利用されていたその一端を窺うことが出来た。

本稿では、その調査方法を引き続き用い、『幽夢影』の編集状況について調査を行うこととした。『幽夢影』は張潮の格言集（清言集）であるが、友人たちの間でよく讀まれ、今現在傳わっている『幽夢影』には、多數の人物の評語が附されている。しかしその評者には遠方の人物もおり、その場合これらがどのようにして附けられ、どのように傳播していったか等については、不明な點が多い。一方で張潮と友人たちとの間で交わされた書簡には、これについて少なからず記載されている。そこで本論では、張潮の書簡集『尺牘友聲』及び『尺牘友聲偶存』中の『幽夢影』に關する記述を調査し、内容を一つ一つ丹念に分析することによって、その一端を考察していきたい。

1. 張潮と『幽夢影』

a. 張潮とその交遊關係

張潮（一六五〇—一七〇九？）字は山來、號は三在道人・心齋居士。安徽歙縣（新安）の人。一六八〇年頃に揚州に居を移し、父の版元（詒清堂）を受け継ぎ、出版活動に心血を注ぎ、とりわけ同時代の文人たちの小品作品（短編の筆記小説）を集めた三種類の叢書（前掲）を編輯・刊行したことで知られる。また、本論で述べる『幽夢影』も當時の文人たちに愛讀された。その他、『心齋聊復集』『心齋詩集』『心齋雜組』『古文尤雅』『詠物詩』等の著書がある。

彼は後述の書簡集等からも分かる通り、江南を中心として幅広い文人交遊ネットワークを有しており、それを巧みに利用して、自身の文學活動や出版活動を行っていた。その状況については詳しくは拙論⁽²⁾を参考にされたいが、北は北京から南は福建まで、實に様々な文人との交遊が見られる。著名な人物としては、王士禛・孔尚任・黃周星・張竹坡・冒襄・余懷・褚人獲・卓爾堪・張英・八大山人等枚舉に暇がない。張潮は前述の編集・出版作業等多忙であり揚州を離れられなかったため、彼らとの交流は主に書簡によって行われた。

これら幅広い交遊關係の上に成り立っているのが、張潮が編纂した三種類の叢書や、本稿で論ずる『幽夢影』ということができる。

b. 『幽夢影』と評語

『幽夢影』は、張潮が著した格言集（清言集）で、テキストにもよるが、全217條の項目に分かれている。その中には、讀書・音樂・花鳥風月・趣味・人生・才子佳人・學問・文學といった多方面に及ぶ格言が記されており、當時の文人たちの趣向の一面が窺える。更に特筆すべきは、この張潮の格言（本文）に對して、同時代の文人が多數の評語を附していることである。その人數はのべ109名、評語の数は564箇所にも上り、これらが作品に更に彩りを加えており、むしろ本文と評語とを合わせて讀むことによつて、より『幽夢影』の面白さが際立つとも言える。⁽⁴⁾ その評語の特徴は、單に本文に對するものだけではなく、他の評者の評語に向けた評語も見られ、評者同士で意見を戦わせるということもあり、いわばこの作品が文人たちのコミュニティスペースの一つとして機能している様相の一端を窺う事ができる。

なお『幽夢影』の研究については、特に近年中國で盛んであるが、日本でも研究が行われている。⁽⁵⁾ また、『幽夢影』のテキストや注釋についても、中國で多く出版されている。⁽⁶⁾ 先行研究によると、『幽夢影』の刊行は諸説あり、およそ

一七〇〇年頃とされているが、實際にその編集に要した期間はかなりの長さとなる。それは、本文自體は大分前にその原型が完成していたが、評語の収集に時間を費やされた、ということである。詳しくは後述する。

c. 三種の叢書について

張潮が二十年餘りの年月をかけて編纂したのが、『虞初新志』（全二十卷。約150作品、テキストより異なる）、『檀几叢書』（初集・二集・餘集、全168作品）、『昭代叢書』（甲集・乙集・丙集、各50作品）で、當代（明末清初）の文人たちが制作した小品文（短編作品）を集めた叢書である。これらは、それぞれ編纂の過程や年代は若干異なるが、一六八〇年代初めより一七〇〇年代半ばまでにかけて、同時並行的に順次編纂し刊行された。張潮の後半生は、この叢書の編纂に心血を注いだと言つてよいであろう。その間、張潮は掲載作品を廣く搜索し、或いは自身で作品を入手したり、友人知人の手を借りて収集したり、あらゆる手段を用いている。収集した後も、掲載作品の選定や、校訂作業、刊行後の郵送等に心を砕いた。この編纂の様子は、張潮と友人たちとの間で交わされた書簡の中にしばしば登場し、その一面を窺うことが可能である。後述の通り、『幽夢影』も時期的に見てこれら叢書と同時期に編集作業が行われており、張潮の叢書や作品とともに友人たちの手に届けられることもあった。その意味では、一連の出版活動の一環が『幽夢影』であるとも言えよう。

d. 張潮の書簡とその傳達について

當時の書簡傳達は、現在のような組織的な郵便制度は確立しておらず、個々人がつてを頼りに傳達するしか方法がなかった。つまりそれは、それぞれの人脈が大きく影響することになる。張潮の時代における書簡の傳達者は、家族・親類縁者や使用人、友人・知人、商人・僧侶等であり、このついでに傳達してもらうのが通常であった。となれば、當然郵便事故が起る可能性は少なからず存在し、返信が届かないために何度も同じ文面の書簡を送ることもしばしば見

られる。このような状況の中、張潮はあらゆる人脈を巧みに活用して、書簡や荷物（作品等含む）を各方面に傳達している。その状況は、友人が張潮に寄せた書簡を集めた『尺牘友聲』（全十五卷。全1009通。以下『友聲』と稱す）と、張潮が友人たちに寄せた書簡を集めた『尺牘友聲偶存』（全十一卷。全456通。以下『偶存』と稱す）にその一端が見て取れ、本論ではこれを中心的な資料として論じてくこととしたい。⁽⁷⁾⁽⁸⁾

張潮の書簡を見ると、北は北京、南は福建、西は四川に至るまで、各地の文人との間で書簡が交わされているが、その中心は安徽・江蘇・浙江等江南を中心とした一帯である。特徴的なのが、北京のような長距離に傳達する場合には、都合良く北京に向かう、或いはその反対に北京から揚州に向かう友人・知人・商人・僧侶等を利用することが多い。一方で、江南一帯への傳達については、各方面に傳達者の中心的存在（例えば、江蘇であれば錢岳、杭州であれば王暉等）がおり、彼らの所でいったん手紙を集め、そこからまた個々の文人ネットワークを利用してリレー式に人に依頼して各地へ傳達する様子も見られる。無論、随時傳達者が常に待機している譯では無く、場合によっては適当な傳達者が現れるまでに時間を要し、その地で書簡が滞ることもしばしばであった。以上のように、この時代の書簡傳達は、システムティックなものではなく、個人的・個別的なものであった。

このような中で張潮が如何にして書簡を傳達し、それをどのように文學活動や出版作業に活用していったのか、以下『幽夢影』の編集状況を一事例として考察することにした。

2. 書簡に見られる『幽夢影』の編集状況

さて、張潮の書簡中に見られる『幽夢影』の記述は、『友聲』31通、『偶存』28通に見られる（文末附屬の一覽表を參

照)。この分量は、以前調査した三種の叢書に關する書簡數は、『虞初新志』は『友聲』56／『偶存』26、『檀几叢書』は『友聲』66／『偶存』48、『昭代叢書』は『友聲』94／『偶存』90で、これらと比べると少ない。

その登場年代を見ると、最も古いのは、『友聲』は朱愼(382・戊戌集・一六九三年)が寄せた書簡で、『偶存』は余懷(77・卷二・一六八九年以前)に寄せた書簡である。最も遅いのは、『友聲』は蔣繼搏(103・新集卷五・一七〇五年)、『偶存』は沈思倫(426・卷十一・一七〇四、五年)である。『友聲』と『偶存』で最も古い書簡の年代がかなり異なるが、それは『偶存』77・78(余懷・卷二)・113(王暉・卷三)は後述の通り『幽夢影』の序文制作者であり、その制作のためにいち早く『幽夢影』を渡してしていたものと考えられる。『幽夢影』の贈呈に關する書簡は、それよりも後の118(江之蘭・卷三・一六九五年以前)の記述が最初である。なお、これらの内書簡113以外は、『幽夢影』を『香夢影』と記している。これは『幽夢影』の初名である。⁽⁹⁾

本節では、その中で『幽夢影』自體がどのように傳達・贈呈され、またその依頼がされたかに關する記述をみてみたい。⁽¹⁰⁾

a. 贈呈(張潮→友人)、贈呈の依頼と謝辭(友人→張潮)

贈呈については、朱襄・釋廣蓮・愛新覺羅樂端・黃雲・陳鼎・王泉・沈思倫・汪士鋌に寄せた書簡に、贈呈の依頼と謝辭については、王暉・余蘭碩・江之蘭・王泉より届けられた書簡に見られる。以下、それぞれ書簡の内容を見てみよう。

まずは、陳鼎である。陳鼎(字は定九。湖南黔中の人)は張潮の門人で、張潮の傳記である「心齋居士傳」⁽¹⁰⁾を制作している。張潮は彼に書簡を寄せ、「今『檀几叢書』初集五部・『昭代叢書』五部・『幽夢影』四部および『凱旋詩歌』、到着致しましたらお改め下さい」とする。陳鼎は『虞初新志』に「毛女傳」「王義士傳」「雌雌兒傳」(卷九)「烈狐傳」(へ

上卷十」「八大山人傳」「嘯翁傳」「愛鐵道人傳」「活死人傳」「狗皮道士傳」(以上卷十一)「義牛傳」「孝犬傳」「彭望祖傳」「薛衣道人傳」(以上卷十二)、「昭代叢書」に「荔枝譜」(甲集)「竹譜」「蛇譜」(以上乙集)「黃山史概」「滇黔土司婚禮記」(以上丙集)と多數掲載されている。

次は王臬である。張潮は彼に書簡を寄せ、『幽夢影』はお言いつけ通り全四冊呈上致します、また……云々と記している。王臬(字は司直)は、王槩(一六四五—一七一〇。字は安節)・王著(字は宓艸)と兄弟で、ともに南京在住の著名な畫家であり、『芥子園畫傳』の編者の一人でもある。張潮は三兄弟全員と交遊があり、書簡も存在する。更に三人はみな『幽夢影』の評者(王槩4・王著5・王臬15)でもあり、當然二人も『幽夢影』を讀んでいたことが分かる。沈思倫(字は契掌)は、安徽池州の人である。張潮編纂の『昭代叢書』にその著書「學語雜篇」(甲集)が掲載されている。その彼にも『幽夢影』は届けられているが、「その他『幽夢影』はお言いつけ通り三冊呈上致しましたので、……とある。このように、『幽夢影』の場合一冊ではなく、同時に複數冊、また複數回にわたって傳達されることが多い。例えば、王暉の書簡には「……『幽夢影』はふたたび一冊を頂戴して感激しております」とあったり、江之蘭より『幽夢影』が完成した曉には、何冊も頂戴下さることを望みます」とか、王臬より『幽夢影』は多數下さることを求めます」などと依頼されたりしている。これは、その傳達された人物を介して、作品が近隣の文人へ次々と手渡されていった可能性を示唆しており、後述の評語依頼とも關係してくると思われる。

黃雲(一六二一—一七〇二。字は仙裳。江蘇泰州の人)は、その子黃泰來(字は交三)とともに『幽夢影』の評者(黃雲3評、黃泰來12評)でもある。黃雲は後述の孔尙任とも久しく、彼が揚州に赴任していた際、しばしば酒宴に参加している。張潮は彼に書簡を寄せ、「……お尋ねの近刊ですが、昨年編纂した『昭代叢書』及び『幽夢影』(心齋)雜組』、さらに今年制作した『凱旋詩』(未詳)について、先生のご指正を賜り、なお直筆でご指示を頂ければ幸いです。……」云々

と述べている。黄雲の例のように、『幽夢影』だけではなく、張潮や他者の他作品が一緒に傳達されることも珍しくない。例えば、張潮と同郷の汪士鋐（字は扶晨）への書簡に「これ以外に、『集篆感應篇』（不詳）一帙、拙著『幽夢影』の補評一帙、みなお寄せ致しますのでお確かめください」¹⁹云々とある。

前述の通り、張潮は北京の文人とも書簡の應酬が見られるが、その人物は概ね王族や役職についていた役人とその關係者である。その書簡の引き受け手として仲介した人物の一人が張潮と同郷の僧侶、釋廣蓮（字は根潔）である。例えば、張潮は北京に滞在していた釋廣蓮に書簡を寄せ、『幽夢影』四冊、別の一冊は紅蘭主人に進呈下さい。……²⁰と述べている。ここでいう紅蘭主人とは、清の王室に連なる愛新覺羅岳端（一六七一一一七〇四。以下岳端）のことである。岳端は康熙帝の又従兄弟にあたる人物であり、張潮が繋ぎを取っていた有力者中、注目すべき人物の一人である。²¹その書簡の傳達には、上記の釋廣蓮や、紅蘭主人のもとで活動していた文人の顧卓（字は爾立）・朱襄（字は贊皇）等によって行われた。例えば、朱襄には「近刻の『幽夢影』、お送りしましたので、ご確認下さい。幸いに台評を賜れば幸いです。〈貴方への〉荷物とは別の一冊は〈紅蘭〉主人に献上するものです。また、四冊はあなたの所に置き、……」²²等と寄せている。なお、後述の通り岳端には評語や序文の制作も求めている。張潮は彼らの手を介して岳端に書簡を寄せ、例えば「附隨の『幽夢影』は、すでに閱覽に供されたことでしょう。……」²³等と述べている。

以上のように、『幽夢影』の贈呈に關する記述は多いとは言えないが、その中には彼らの手から更にその周邊の人物に『幽夢影』が傳達されている可能性も十分に含んでいる。それは以下の作品の紛失とも關連していると思われる。

b. 作品の紛失について

なお、『幽夢影』は各地の文人たちの好評を博したようで、時たま誰かに作品を持ち去ってしまい、紛失することがあった。例えば、評者でもある龐弼（字は天池。山西高都の人）は、「尊著の『幽夢影』ですが、金臺（北京）に攜えてい

たところ、すべて友人に持っていかれてしまいました。目下搜索していますが見つかりません。……」と記述する。また、朱慎（生没年不詳。字は其恭。浙江武義の人）は以下のような書簡を寄せている。

『幽夢影』一書は、長らく方符白（不詳）が持って行ってしまいました。彼はちょうど日々槐安郡中におり、呼んでも目を覚ましません。どういたしましょうか。ただ我が兄だけが夢（『幽夢影』を指すか）のためにご多忙のことでしよう。みな化して蝴蝶になって飛び去ってしまったら、何處で捕まえればよいのでしょうか。もしもその願末をお知りになりたければ、あなたがさしあたって杜麗娘となって夢を尋ねるのがよいでしょう。（そうすれば）私が李少君とならずにすみます。一笑。²⁵

ここでいう「槐安郡」とは唐代傳奇小説『南柯太守傳』に登場する夢の國の名で、「杜麗娘」は湯顯祖（一五五〇—一六一六）の戯曲『牡丹亭還魂記』のヒロインで、主人公の柳夢梅と夢で邂逅する一幕が「尋夢」である。また「蝴蝶」は無論『莊子』の蝴蝶の夢のことで、「李少君」は、『抱朴子』等に見られる前漢時代の方士であり、前漢の武帝が不老不死の薬を求めた際、夢で李少君とともに嵩山に登り、李少君だけが天帝に召された（死んだ）、という故事²⁶を指すのであろう。これらはみな夢がテーマの故事で、『幽夢影』に擬えた喩え話であると考えられる。なお、これと前後して、張潮も朱慎に以下のような書簡を寄せている。

『幽夢影』が長いこと戻ってきておりません。きっと鄭人が打ち倒した鹿を（取られないように）堀の中に隠し（へてその場所を忘れ）た（へのを夢中の話にした）（『列子』周穆王）のと同じでしょう。あえて學兄が影を捉えた手で私のために夢を尋ねて、（黄帝が夢で訪れたという）華胥の地（『列子』黄帝）の片隅より、なお元の主人に戻して下さるようお願い致します。²⁷

これも夢にまつわる故事を幾つも使用して非常に難解な文章であるが、要するに誰か知り合いに持っていかれてし

まった『幽夢影』を探して下さい、ということをお願いしたのであろう。どちらが先か判別し難いが、いずれにせよ、夢の故事を用いたのに對して、同様に夢の故事で返答したものになっている。ただし、何故両者がこのような婉曲な表現を使ったのか實際の事情はよく分からない。なお、朱愼のものではないが、『幽夢影』中の評語には書名にからめて「夢」や「影」を使ったものも見られる²⁸⁾。

なお、作品の紛失については、『虞初新志』や『檀几叢書』といった叢書の場合にも發生しており、頻繁に書物の貸し借り等が行われていた状況が窺える。とりわけ『幽夢影』の場合、読んで評語を加えて貰うという目的であり、多くの人物に手にとつて貰う必要があつたのであろう。

c. 序文の制作とその依頼について

『幽夢影』には、余懷・孫致彌（一六四二—一七〇九。字は愷似。江蘇嘉定の人）・石龐（一六七一一—一七〇三。字は晦村、安徽太湖の人）の序文と、張愨（一六一九—一六九四。字は僧持。浙江江寧の人）・江之蘭の原跋²⁹⁾、また王暉の題辭が存在する。この中で書簡中にそのやりとりが見られるのは、以下の王暉と余懷である。

まずは、王暉（一六三六—？）。字は丹麓。浙江仁和「杭州」の人³⁰⁾である。王暉は張潮編纂の叢書『檀几叢書』の共編者であり、地元杭州を中心に他数の文人たちと幅廣い交遊があつた。そのため、杭州方面への書簡の傳達や作品の収集等に、深く關與していた。その王暉に寄せた書簡に、「お願いしております『幽夢影』の序文ですが、發刊を待つて、再び頂戴したいと思ひます³¹⁾」とあり、また王暉が張潮に寄せた書簡に、以下のように記している。

依頼されていた『幽夢影』の題詞ですが、私はしばらく筆を握つておらず、まだ下書きも書いておりません。あるいは先生が發刊するのを待ち、幸いに見本が寄せられた時に、きつと數語を記すことでしよう³²⁾。

どちらの書簡が先かは分からないが、いずれにせよ、王暉の序文は刊行直前まで完成していなかつたことが窺える。

王暉の題辭は現在彼の文集には残っているもの、『幽夢影』そのものには掲載されていないことから、刊行には間に合わなかったのではないかと推定される。

余懷（一六一一—一六九六。字は澹心。福建莆田の人）の序文は、實際に『幽夢影』に掲載されている。余懷が寄せた書簡に、「…『香夢影』へ『幽夢影』の初名）の題詞は、すでに起草しましたので、きつとすぐに書き出して校正に回したいと思います。…」とか、「『香夢影』題詞を進呈致します。亂筆にて我が胷中を書き記したまでで、文字の善し悪しは二の次です」等とある。余懷は當時蘇州に住んでいたが、張潮に會うために二度（一六九三年夏と一六九四年夏）揚州を訪ねている。上記の書簡は一六九四年のもので、揚州滞在中の時のものと思われる。これに對する王暉の返信は見られず、恐らくこの揚州訪問の際に直接手渡されたのではないか。

なお、上記以外の人物にも序文を依頼していたのが、前述の岳端である。例えば、釋廣蓮が寄せた書簡に、「以前、『幽夢影』に叙文を制作して下さるようお願いしましたが、主人はすでにご承諾なさいました。しかしながら、いまだに玉稿（『幽夢影』）を目にしていけないので、文章に表すべがありません。幸運にも速やかに届きましたら、すぐさま興に乗じて筆を揮うことは可能です」とある。残念ながら、この岳端の序文については現存するか否かは不明である。

d. 作品の内容に関する質問や感想について

『幽夢影』は様々な文人に讀まれており、その内容に関する質問や感想についてしばしば書簡にしたためて贈っている。單純に賞賛するものから、哲學的な議論に至るまで様々である。畢熙暘・朱慎・張兆鉉・蔣繼搏・胡復亨等の書簡に見られる。以下、代表的なものを見てみよう。

畢熙暘（字は右萬、號は嶠谷）は張潮と同郷の人物である。彼と張潮は書簡においてしばしば三教（儒・佛・道）に関する議論を行っているが、その中に『幽夢影』の例を擧げているものが見られる。張潮は「…しかしながら、いつ

も思うのは、「二氏（佛・道）は絶対に廢してはならない」ということです。拙著の『幽夢影』中で嘗てこれについて言及したことがあります⁽³⁸⁾と述べている。一方の畢熙暘は『佛解』という廢佛論に關する文章も制作しており、張潮編纂の『檀几叢書』二集に收録されている。これは恐らくそれに關連する議論の中の記述であり、この書簡の前半には、それについて長々と言及しているが、本論では割愛する。なお、彼は『幽夢影』中の佛教に關連する格言に對して、複數評語を附けている（『幽夢影』45、201）⁽³⁹⁾。

張潮の甥である張兆鉉（字は貫玉）は、以下のような書簡を寄せている。

『幽夢影』一書を讀むと、その中には格言が有り、理學が有り、創解が有り、幻想が有り、別見が有り、奇思が有り、韻語が有り、趣論が有り、異説が有り、麗情が有り、經濟が有り、戲謔が有り、醒世驚人の言葉が有ります。とおむね顯著で幽玄ではなく、覺醒して夢中ではなく、質朴で幻影ではありません。それなのにこれを『幽夢影』と名附けたのには、必ず謂われがあるのでしょうか、私にはどのような謂われがあるのか分かりません。はつきりとお教え頂ければ幸いです。……⁽⁴⁰⁾

張兆鉉と同様に、『幽夢影』の題名に關する質問は、蔣繼搏（字は宋徵。江蘇江都の人）の書簡にも見られる。

かつて佛氏の書を讀み、次のようにありました。「一切の有爲の法は、夢幻泡影の如し⁽⁴¹⁾」と。思うに、影は虚構で現實ではありません。心齋先生の『幽夢影』を讀むと、一字一句はみな實學であり、我が儒のいわゆる影と佛氏のいわゆる影とは、もとより當然異なります。しかしながら、我が儒の中には實學にそむく者もとても多いのです。その文字や言葉を見ると、結局のところ（互いに）影響が及んでいるのは、そもそもまた何故なのでしょうか。心齋先生にお尋ね致します⁽⁴²⁾。

残念ながら、これらの質問に關する張潮の返信は見られない。

前掲の朱愼が寄せた書簡に「先にお示しの『心齋』雜俎』及び『香夢影（幽夢影）』二種ですが、一字一字が斬新で素晴らしく、類を見ない作品です。私が明かりを照らして書を読めば、ただその素晴らしさにため息をつくばかりで、安易に取捨しようと思つても、そのすべがありません。……』とある。また、胡復亨（字は會來。湖北黃州の人）は「先生の『幽夢影』諸編を読むことができ、痛快無比で、……』とか『幽夢影』は風流で溫和で、蒙莊（莊子）のような達觀さがあります。……』など」と記し、また楊衡選（字は聖藻。江蘇涇陽の人）は、「……今『香夢影（幽夢影）』は一段一段が人の心を開かせるもので、一つまみの香を焚き、一緒に莊子の『南華（真經）』（『莊子』）を読めば、晉人の清談も、無意味に感じるほどです。すぐに上梓して蒙を啓くことを望みます」と感想を述べている。

以上の人物の内、蔣繼搏以外はみな『幽夢影』の評者でもあり、もしかすると彼らがその時讀んだ『幽夢影』は、まだ全ての評語が掲載されていない評者閱覽用の『幽夢影』であつた可能性も考えられる。例えば、前掲汪士鋐への書簡にも「幽夢影補評」二々とあり、「補評」のない『幽夢影』も存在していたのかもしれない。

3. 書簡に見られる『幽夢影』の評語の編集状況

a. 『幽夢影』の評者とその評語について

『幽夢影』には、564箇所に、109名の文人の手による評語が附されている。その主要な人物については、以下の通りである。なお、詳しくは文末の表1も参照のこと。

評語数の多い人物（10箇所以上。傍線は書簡が存在する者）は、張竹坡（83）、江之蘭（49）、倪匡清（23）、陸次雲（21）、顧彩（18）、尤侗（17）、石龐（17）、殷署（15）、龐弼（15）、王臬（14）、孫致彌（12）、周之樞（12）、張漸（12）、

黄泰來(11)、李淦(11)、尤珍(10)である。その他、著名な評者として、黄周星(7)、王暉(5)、冒丹書(3)、吳綺(3)、余懷(4)、龔賢(1)、施閏章(1)、惲格(3)、卓爾堪(1)、戴名世(1)、杜濬(3)、孔尙任(3)等の名が見られる。

『幽夢影』の評者のうち、張潮との間で書簡が残されている者は『友聲』512通・『偶存』238通、全83名で、そのうち『幽夢影』に關連した書簡は『友聲』31通・『偶存』20通、全31名である。本稿附録の表1を見れば分かる通り、およそ8割弱が張潮と書簡のやりとりがある人物である。

なお、他誌⁽⁵⁾で述べたとおり、張潮の文集である『心齋聊復集』にも多數の評語が掲載されており、その評者は30名ほどであるが、『幽夢影』の評者と共通する人物が見られる。ただし、こちらはどちらかというところ、張潮の出身である安徽歙縣の友人や、弟や甥といった親族が中心となっており、『幽夢影』とは若干毛色は異なるものの、張潮の評語を理解する上で興味深い作品であるが、本論では割愛する。

ところで、これら評語はどのようにして交わされていたのか、前掲先行研究等から勘案して、その可能性として考えられるのは大きく分けて以下の2点である。

1. 直接當人と會って評語制作を依頼し、その場で制作してもらった。

2. 書簡を添えて『幽夢影』の原文を送り、それに評語を附けてもらい、返信して集めた。

つまり、揚州等比較的近くに在住したり、揚州に滞在していた者、或いは詩會や宴席等で集まった者については、直接依頼して集めたと想定出来るが、その場合は書簡に記されることは少なかつたであろう。その一方で、遠方の人物に依頼する場合は、むしろ書簡や他者の仲介等間接的な方法に頼らざるを得ず、その地域に住む特定の友人に書簡或いは作品も添えて贈り、彼から更にその身近な人物に作品を渡して廣めていき、評語も収集し、それを張潮へと返送する、

という假説が成り立つであろう。

ところで、他誌⁵¹⁾でも言及した通り、評者の中で没年の判明している中で最も古い人物は、詩人の黄周星（一六八〇年没）であり、それ以前に『幽夢影』の原型が存在していたと思われる。また、後述の書簡の記述からも分かるように、評語は早くとも一七〇三、四年頃まで加えられている。このように、評語が附された期間は、かなりの長さにとらわれて推定される。この中で、少しずつ評語が収集され、現在の『幽夢影』が出来上がったのではないか。それらを踏まえながら、以下それぞれの書簡の内容を見てみよう。

b. 作品（評語を含む）の郵送手段について

まずは、尤侗（一六一八—一七〇四。字は展成。江蘇長州の人）の評語がどのようにして張潮の手に渡ったのか、何名かの書簡から見よう。まずは、尤侗に寄せた書簡に『幽夢影』のあなたの評語ですが、まだ頂戴しておりません。お送り下さることを願っております。……⁵²⁾とあり、彼の評語がなかなか張潮の手に届かなかった様子が窺える。張潮と同郷の吳錫晉（字は子山）は、「ここにお手紙でご機嫌をお伺いし、あわせて西堂（尤侗の雅號）先生の閲覽した『幽夢影』を持參致します。伏してご査收下さるようお願い致します。……⁵³⁾といい、更にそれよりしばらく後に寄せた他の書簡で「戊寅（康熙三十七「一六九八」年）の春、たまたま一函をお送りしました。西堂先生が評語を附けた尊著の『幽夢影』を差し上げます⁵⁴⁾」云々と述べている。なお、尤侗の息子尤珍（一六四七—一七二一。字は慧珠）も評者であり、張潮が彼に寄せた書簡に「拙著の『幽夢影』の過分な評語を頂戴致しました。感激この上もございませぬ。……⁵⁵⁾と彼の評語を受け取った様子が見られるが、これが尤侗の評語と同時に受け取ったものか、別に受け取ったものかについては分からない。ただし、この尤珍の書簡が尤侗に寄せた書簡よりも大分後に寄せられていることを考えると、別だったのかもしれない。なお、尤侗（17箇所）・尤珍（10箇所）合わせて27箇所に評語が附けられている。

一方、錢岳（字は十青。江蘇蘇州の人）も尤侗が制作した『幽夢影』の評語を張潮に届けている。例えば、錢岳は「その『幽夢影』ならびに『心齋』雜俎」の評語は、わたくし岳が直にお目にかかって差し上げます」と記しており、その後張潮は尤侗に寄せた書簡に「初夏、錢十老（錢岳）がやってきて、あなたのお書き下さった『幽夢影』の評語を拜領致しました。……」と實際に評語が手元に届いたことを報告している。吳錫晉の寄せたものとは異なるとすれば、追加の評語だったのかもしれない。なお、錢岳は尤侗だけではなく、江蘇周邊の文人たちとの間で交わされた書簡もしばしば傳達している。

次に『桃花扇傳奇』の作者として知られる孔尚任（一六四八—一七一八。字は季重。山東曲阜の人）の例を見てみよう。孔尚任は一時期揚州（一六八六—九〇年頃まで）に赴任していたが、その後は康熙三十九（一七〇〇）年に官を辭めるまで、ずっと北京で任に就いていた。そのため、孔尚任は直接評語を張潮に手渡すことは不可能であり、その傳達には親類や使用人・友人等の手を借りることになる。無論これは、評語だけでは無く、自他の作品の贈呈や受け取りに關しても同様であった。例えば、張潮は孔尚任に書簡を寄せ、「拙著の『幽夢影』は、今年また上梓しようと思つていまず。先年宣城の友人袁中江（啓旭）が攜えて都門（北京）に入り、諸老先生の評語を求めました。中江は突然この世を去つてしまわれたので、この書がどこにあるのか分かりません。まもなく上梓致しますが、版木を留めて補評をお待ちし、まだ増入させることは可能です」と記し、追加の評語を求めている。孔尚任の評語は、3箇所に見られる。なお、袁啓旭（字は士旦、號は中江。安徽宣城の人）も評者（8箇所）であり、張潮との書簡が残っている。

その他、張潮の親族に評語の郵送を委託した者も見られる。前掲の沈思倫は、張潮に寄せた書簡で以下のように記している。

時に『幽夢影』の中における諸家の評語を見ると、まだ餘白があります。妄りに數語を書こうと思ひ別紙に記録し

て呈上致します。ちょうど採用すべきものがございましたら、一つ二つ載せて頂ければ幸いです。しかしながら、すべてあなたのご意志に従います。私の非禮をお許し頂ければと存じます。あなたのご親族の諧石先生へ張韻。張潮の甥」とお會いた時、代わりにお渡し下さるよう頼みました。⁽⁶⁷⁾

張韻は揚州在住であったが、この時どこにいたのか分からない。彼に關する書簡を見ると、しばしば他者の書簡や荷物を仲介している様子が窺える。

また、前述の沈思倫に寄せた書簡には、「お申し附けの拙著『幽夢影』ですが、しばらくはまだ印刷致しません。あなたの評語はすでに數條ご威光をお借りしており、印刷するのを待ってお送り致しますのでご覧下さい」とある。なお、沈思倫の評語は4箇所である。

c. 評語の制作と感想について

これについては、余懷・江之蘭・釋廣蓮・朱襄・尤侗・尤珍・冒丹書・王棠・張道深・胡其毅・顧彩・曹鎰・王臬との間に交わされた書簡に見られる。傾向として『幽夢影』の感想とともに寄せる事が多い。張潮は、前掲の余懷に對して以下のような書簡を寄せ、評語の制作に謝意を述べている。

『幽夢影』一編に至りましては、數語をお書き添え下さることをお願い致しましたが、嫌な顔一つされずにお引き受け下さいました。どうか〈東漢の〉王方平〈蔡經が麻姑によからぬ思いを抱いた時に、彼を鞭で叩いた人物〉が鞭を揮って叱ったのか、それとも麻姑が意に介さなかったのかは、お考えにならないで下さい。そうでなければ呂祖〈呂洞賓〉の所謂「吾の人に求むること、人の吾に求むるよりも甚だし」というものかもしれません。僕は先生を仙班の領袖であり、現代の呂祖だと理解しています。ひたすら世の中を渡ることを肝に銘じ、必ず些細な議論にも聴く手間を惜しまなかつたので、このような妄想にもお付き合下さり、お察し下さつたのでしょうか。⁽⁶⁸⁾

また、續く書簡でも「我が『幽夢影』があなたの名文を頂いて、箔が付きましたことは、非常に感激致しております。…」と記している。なお、余懷は張潮の叢書に複数の作品を掲載している。

次の二人は、張潮と同郷の人物である。まず王棠（字は名友）は、

『幽夢影』一書は世俗を癒やし、格言に屬しています。しかしながら却って少しも道學の氣配が無く、後世に傳えるのに間違ひございませぬ。お命じに従って、むやみに評語數則を作りました。この素晴らしい作品にお入れ下されば幸いと存じます。私にはまだ數篇ございしますので、お返事を待つて、またお寄せ致したく存じます。

と述べている。次に、江之蘭（前述）に關する書簡を見てみよう。張潮は以下のような書簡を寄せている。

我が『幽夢影』一書は、我ながらとても他とは異なつた趣が豊かです。そこで友人が持つて都門に入りました。彼が返送してきて、始めて上梓することが出来ます。この中にはあなたの饒頭（料理でご飯等の上にかける汁物（あんかけ））。ここでは江之蘭の評語を指すか）が上にかかつており、まさしく五侯鯖（非常の珍味）と言えるでしょう。

一方で江之蘭は、

『幽夢影』の我が評語には、大意を補うもの、全體を把握したもの、斷章取義的なもの、遠回しなものが有ります。學兄にはその文藝を愛するお心やご慧眼でご了解いただき、（我が評語を）取り除かないで下されば、これ以上饒舌に語ることは致しません。

と述べている。江之蘭は評者全體でも二番目に多い49箇所に評語を附している。

冒丹書（一六三九—一六九五。字は青若。江蘇如阜の人）は冒襄（二六一—一六九三。字は辟疆）の息子である。冒襄も評者であり、張潮と書簡のやりとりも見られる。冒丹書は父の死後、その遺作を張潮の叢書に掲載しよう要請

している。冒丹書は「先生の『幽夢影』の文章を拜讀し、大いに人の心目を豁かせ、その意が世俗を超越しており、みな再來人（佛陀）のお言葉のようです。お命じ通り幾つか評語を附けましたが、立派な作品を汚すことになるかもしれない。原文呈上します。∴大著のうち江合傲（之蘭）先生の諸評も絶品で、傾慕するに値します。∴」⁽⁶⁹⁾と記している。

前掲の朱裏に對して、張潮は岳端に一冊を贈呈した以外に、「また四冊はあなたの所に置き、もし諸公で敢えて評語をお加え下さる方がいらつしやれば、（私の）代わりにお求めになって頂いて結構です。その（評語の）お言葉は、お世辭を使わず、批判や嬉笑、怒罵でも構いません⁽⁷⁰⁾」と記して、北京在住の文人たちに『幽夢影』を複数冊回覽して、評語を集めるよう依頼していた様子が窺える。これに關連して前掲・釋廣蓮に寄せた書簡にも同様に「今『幽夢影』四冊寄せましたので、ご査収下さい。もし諸公で評語を賜ることがありましたら、代わりにお求めになることも妨げません⁽⁷¹⁾」とある。

次の二人は、直接揚州で張潮と會見し、その後書簡を寄せている。張道深（一六七〇—一六九八。字は自得。江蘇蘇城の人）は、雅號の竹坡の名で知られる。彼は張潮を叔父と慕い、一時期張潮の家に滞在していたことがある。彼は『幽夢影』の評者としては最多の83箇所の評語を制作している。以下は、張潮の家でご馳走になった謝禮とともに、評語を寄せたことを記している。

∴お教え頂いた『幽夢影』ですが、純粹完美的な語り口で、萬物道理の妙を發しています。小姪（私）は旅先で酒の肴もなく、この數日の酒杯を得て、とても贅澤な山海の珍珠が並び、この上もなく幸せです。身の程を省みず、妄りに無駄な言葉（評語）數則を記します。老叔臺（あなた）から進んで私にお教え下されば幸いです。∴⁽⁷²⁾

顧彩（一六五〇—一七一八。字は天石。江蘇無錫の人）は戲曲家として知られ、前述の孔尙任とも親しく、彼が揚州

に赴任していた際にしばしば交流し、それが後の『桃花扇傳奇』制作にも関連していく事となる。顧彩は張潮とも親しく、多くの書簡が残されている。その彼は張潮の家を訪問し、その翌日に寄せた書簡で次のように述べている。

昨日はお騒がせして申し譯ございませんでした。歸つてから『幽夢影』を読み、一則ごとに絶叫しました。今批語の附いていない部分に、僭越ながら數語を添えました。あなたの立派な作品に、書簡で補足させていただきました。が、もしも多すぎるとお思いでしたら、數語を他の友人の下に移しても構いません。⁽¹³⁾

この書簡からも『幽夢影』が單に友人から集めた評語をそのまま加えただけではなく、その評語の内容や、一つの格言につき附ける評語の數量のバランス及び順番等も考慮した上で編集されている様子が窺える。その一端は、次の胡其毅（字は致果。江蘇江寧の人）が寄せた書簡にも見て取れる。

今尊著の『幽夢影』を拜讀しましたが、すべて叡智の發するところにもとづき、また味わい深く何とも言えない味があり、晉人の『世説（新語）』にも匹敵し、宋儒も遜るべきものです。謹んで櫟園公（周亮工）の書影一編（不詳）を差し上げますので、奉じて帳中の祕となさして下さい。評語數編を附屬するようお命じになりましたので、敢えて外さずに、誤つて四則を付けました。ご指正下さるようお願い致します。⁽¹⁴⁾

なお、實際に『幽夢影』に掲載されている胡其毅の評語は2箇所である。

曹鈴（字は仲谷。河北豊潤の人）は、詩人として知られる。彼は「頂戴したあなたの書籍は一日中奉讀致しました。やつと『幽夢影』一種を読み終わり、拙さを省みず、評語一つ、二つばかり書き記しました。ご立派なお方（張潮のことか）の目に觸れたでしょうか。特に呈上します。すぐに私にお教え下さることを切に願います。…」と記している。⁽¹⁵⁾

その外、前掲の王臬は書簡を寄せて「舍親の沈契掌（前述）が寄せた『幽夢影』を、手を洗つて奉讀し、自然と心が廣がり精神が伸びやかになり、はっと氣がつかされました。まことに大幸です。…そこで身の程もわきまえず、評語

數語をあなたの立派な作品の末尾にお加え頂きたく存じます⁽⁷¹⁾と述べ、また間もなく寄せた書簡でも『幽夢影』のつたない評語で立派な文章に續けてしまいました⁽⁷²⁾が、記録するに値する者は、お選びになり採用して下さいれば、私もまた幸いに不朽となります⁽⁷³⁾」云々と記している。

おわりに

以上、張潮の書簡より、『幽夢影』およびその評語に關するものを取り上げ、その内容を分析した。全容を解明したとまでは言えないが、『幽夢影』がどのように友人たちの手に渡り、評語が制作され、それが張潮に戻されていたのか、書簡の傳達状況を通じて、その一端を窺うことは出来たのではないだろうか。今後は更に周邊資料を搜索し、それを丹念に分析することによって、その全容を解明していきたい。

表一、『幽夢影』の評者一覽(五十音順)

16	汪士鋐	王暉	王著	殷簡堂	No.	評者	評	書簡
1	○	5	5	1	×			
17	汪楫	王仲儒	王梟	殷署	②	No.	評者	評
1	○	1	14	15	○			書簡
18	何五芝	王業	王子直	惲格	3	No.	評者	評
1	○	6	1	2	○			書簡
19	紀映鐘	王方岐	王仁	袁啓旭	4	No.	評者	評
1	○	1	1	8	○			書簡
20	姜實節	王璞庵	王正	王槩	⑤	No.	評者	評
1	○	2	1	4	○			書簡

101	96	91	86	81	76	71	66	61	56	51	46	41	36	31	26	21
尤侗	方熊	梅文鼎	鄭晉德	陳均	張漸	曾燦	曹鎰	沈思倫	朱若極	釋師昂	蔡瑩	黃周星	江之蘭	吳綺	倪匡世	龔賢
17	1	1	4	9	12	1	2	4	1	1	1	7	49	3	23	1
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	○	○	○	×	○	○
102	97	92	87	82	77	72	67	62	57	52	47	42	37	32	27	22
余懷	龐弼	范國祿	鄭藩修	陳鼎	張淳	戴名世	曹貞吉	石龐	朱慎	釋海岳	施閏章	黃泰來	江注	吳山濤	胡其毅	許承家
4	15	1	1	2	1	1	1	17	6	8	1	12	2	1	2	2
○	○	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
103	98	93	88	83	78	73	68	63	58	53	48	43	38	33	28	23
余肅	冒襄	畢熙陽	狄德	陳翼	張惣	卓爾堪	曹溶	先著	聶先	釋浮村	謝開寵	崔如岳	洪嘉植	吳肅公	胡復亨	許承宣
1	4	7	1	8	2	1	2	1	2	1	1	1	5	8	1	1
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○	×
104	99	94	89	84	79	74	69	64	59	54	49	44	39	34	29	24
余蘭碩	冒丹書	閔麟嗣	杜濬	程京蓐	張道深	譚宗	孫枝蔚	錢觀	徐硯谷	周之樞	釋元壠	查士標	黃雲	吳雯炯	顧彩	許楚
5	3	2	3	1	83	1	1	2	1	12	1	1	3	1	18	1
○	○	○	○	×	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	×
105	100	95	90	85	80	75	70	65	60	55	50	45	40	35	30	25
楊銜選	尤珍	方淇蓋	梅庚	程邃	張兆鉉	張韻	孫致彌	宗元豫	徐崧	周穉廉	釋行添	崔蓮峰	黃孔植	孔尚任	吳嘉紀	靳治荆
6	10	1	1	1	7	1	12	2	1	1	2	1	1	3	2	1
○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	×	○	×	×	○	×	○

106	李滄	11	○	107	李聖許	6	×	108	李荔園	1	×	109	陸次雲	21	○	總計	564	83
-----	----	----	---	-----	-----	---	---	-----	-----	---	---	-----	-----	----	---	----	-----	----

※姓の五十音順とし、漢字の畫數の正順とした。 ※張潮の叢書『虞初新志』『檀几叢書』『昭代叢書』(甲・乙・丙集)に作品が掲載されている者には、通し番號を□で圍った。 ※評者の傍線は名が不明で字號の者。 ※ゴチック太字の評者は表4掲載の人物。 ※評一『幽夢影』中の評語數。 ※書簡一『尺牘友聲集』『友聲偶存』中の關連書簡の有無。

表2. 『尺牘友聲集』中の『幽夢影』に關する書簡(各巻別)

卷數	幽	總數	年代(西曆)	No. (差出人)
甲	0	97	一六八〇以前	なし
乙	0	94	一六八九以前	なし
丙	0	94	一六八九以前	なし
丁	0	82	一六九二	なし
戊	4	85	一六九三	382 朱愼 385 余懷 386 余懷 404 楊銜選
己	4	63	一六九四	458 王暉 477 朱愼 503 江之蘭 519 冒丹書
庚	1	76	一六九五	547 王棠
辛	1	59	一六九六	636 張竹坡
壬	9	63	一六九七	661 江之蘭 679 胡其毅 688 李滄 694 王暉 695 尤侗 696 釋廣蓮 704 顧彩 711 錢岳 716 余寶碩

五	四	三	二	一	癸
3	2	1	3	1	2
55	39	35	55	60	52
一七〇五	一七〇三、四	一七〇一、二	一七〇〇	一六九九	一六九八
999 龐弼 1012 王臬 1013 蔣繼搏	937 王臬 943 王臬	915 沈思倫	856 胡復享 869 吳錫晉 877 曹鈴	798 胡復享	722 吳錫晉 727 張兆鉉

表3. 『尺牘友聲偶存』中の『幽夢影』に関する書簡(各巻別)

五	四	三	二	一	卷數
7	2	2	2	0	幽
39	44	35	48	55	總數
一六九六、七	一六九五	一六九五以前	一六八九以前	一六八〇前後	年代(西曆)
184 孔尙任 191 釋廣蓮 192 朱襄 198 釋廣蓮 202 愛新覺羅岳端 210 黃雲 213 尤侗	164 江之蘭 176 畢熙暘	113 王暉 118 朱愼	77 余懷 78 余懷	なし	No. (宛名)

※一拙稿「張潮『尺牘友聲集』『尺牘友聲偶存』研究資料編」表2の書簡通し番號

※幽—『幽夢影』關連の書簡數 ※總數—卷全體の書簡數 ※年代—推定制作年代

十一	0	28	一七〇四、五	なし
十	3	48	一七〇二、三	380 汪士鋐 423 王臬 426 沈思倫
九	1	42	一七〇一	356 沈思倫
八	0	44	一七〇〇	なし
七	1	43	一六九九	284 尤珍
六	2	30	一六九七、八	231 尤侗 234 陳鼎

※―拙稿「張潮『尺牘友聲集』『尺牘友聲偶存』研究資料編」表3の書簡通し番號

表4. 張潮の書簡に見られる「幽夢影」に関する書簡の宛名(偶存)と差出人(友聲)〈五十音順〉

No.	氏名	字・號・出身	偶(總/幽)	友(總/幽)	備考
1	愛新覺羅岳端	字は正子・兼山、號は紅蘭(室)主人。 河北遷安。	16 / 1	2 / 0	
2	王臬	字は司直、號は汝陳。江蘇嘉定。	2 / 1	3 / 3	評語(15)
3	王暉	字は丹麓、號は木菴。浙江仁和。	35 / 1	28 / 2	評語(5) / 題辭 / 虞3・檀4・昭7
4	王棠	字は名友、號は勿翦。安徽歙縣。	1 / 0	3 / 1	評語(6)
5	汪士鋐	字は扶晨、號は栗亭。安徽歙縣。	10 / 1	17 / 0	評語(1)
6	胡其毅	字は致果・靜夫。號は靜拙齋。江蘇江寧。	1 / 0	2 / 1	評語(2)
7	胡復亨	字は會來。湖北黃州。	0 / 0	2 / 2	評語(1)

28	余懷	字は澹心、號は憂翁・廣霞。福建莆田。	8 / 2	14 / 2	評語(4) / 序文 / 虞3・檀1・昭2
27	尤侗	字は展成、號は悔菴・西堂老人。江蘇長州。	5 / 2	5 / 1	評語(17) / 虞1・檀3・昭5
26	尤珍	字は謹庸、號は慧珠。江蘇長州。	1 / 1	1 / 0	評語(10) / 昭1
25	冒丹書	字は青若、號は卯君。江蘇如皋。	3 / 0	12 / 1	評語(3) / 檀1
24	龐弼	字は天池、號は筆奴。山西高都。	0 / 0	3 / 1	評語(15)
23	畢熙暘	字は右萬、號は嶼谷。安徽歙縣。	5 / 1	13 / 0	評語(8) / 檀1
22	陳鼎	字は定九、號は留溪。湖南黔中〔浙江江陰とも〕。	1 / 1	7 / 0	評語(6) / 虞・昭5
21	張道深	字は自得、號は竹坡。江蘇彭城。	0 / 0	3 / 1	評語(83)
20	張兆鉉	字は貫玉、號は迂菴。	6 / 0	15 / 1	評語(7)、張潮の甥。
19	曹鈴	字は仲谷、號は松茨。河北豐潤。	1 / 0	1 / 1	評語(2)
18	錢岳	字は蘊生、號は十青。江蘇蘇州。	1 / 0	11 / 1	
17	沈思倫	字は契掌、號は閑吾。安徽池州。	8 / 2	1 / 1	評語(4) / 昭1
16	蔣繼搏	字は宋徵。江蘇江都。	0 / 0	1 / 1	
15	朱慎	字は其恭、號は菊山。浙江武義。	6 / 1	15 / 2	評語(6)
14	朱襄	字は贊皇、號は織字軒。江蘇無錫。	6 / 1	5 / 0	
13	釋廣蓮	字は根潔。安徽歙縣。	6 / 2	3 / 1	
12	吳錫晉	字は子山。安徽歙縣。	0 / 0	2 / 2	
11	黃雲	字は仙裳、號は舊蕉。江蘇泰州。	3 / 1	14 / 0	評語(3)
10	江之蘭	字は合徵、號は文房。安徽歙縣。	13 / 1	15 / 2	評語(49) / 序文 / 昭2
9	孔尙任	字は聘之、號は東塘。山東曲阜。	18 / 1	20 / 0	評語(3)
8	顧彩	字は天石、號は夢鶴居士。江蘇無錫。	4 / 0	15 / 1	評語(18) / 虞2・昭1

29	余蘭碩	字は香祖、號は少霞・湘客。福建莆田。	0 / 0	8 / 1	評語 (4)
30	楊衡選	字は聖藻。江蘇涇陽。	0 / 0	5 / 1	評語 (6)
31	李淦	字は季子、號は礪園・水樵。江蘇興化。	1 / 0	4 / 1	評語 (11) / 檀 1

※總／幽—各人物の書簡集に収録されている書簡の總數／『幽夢影』に關する書簡數。 ※作者—『幽夢影』に評語が存在する者。() は評語の數。 ※虞・檀・昭—それぞれ『虞初新志』『檀几叢書』『昭代叢書』における作品の掲載數。

※參考—出身地別一覽 安徽歙縣 5 揚州 1 浙江 2 (仁和 1・武義 1) 江蘇(泰州 1・長洲 2・蘇州 1・彭城 1・如皋 1・嘉定 1・江寧 1・無錫 2・池州 1・涇陽 1・興化 1) 湖北黃州 1 湖南 1 (黔中 1 [浙江江陰とも]) 山東曲阜 1 河北 3 (磁州 1・豐潤 1・遷安 1) 山西高都 1 福建莆田 2 不明(親族) 1

注

- (1) 「書簡から見た張潮『虞初新志』の編集狀況」(大東文化大學『漢學會誌』五十四號・二〇一五年三月)、「書簡から見た張潮『檀几叢書』の編集狀況」(大東文化大學『漢學會誌』五十五號・二〇一六年三月)、「書簡から見た張潮『昭代叢書』の編集狀況」(大東文化大學『漢學會誌』五十八號・二〇一九年三月)
- (2) 「張潮と江南文人の交流—書簡を手がかりに—」(『中國古典小説研究』十八號・二〇一四年三月)
- (3) 合山究譯注『幽夢影』(中國古典新書・明德出版社・一九七七年)による。219條とするテキストもある。
- (4) 詳しくは、拙論「張潮『幽夢影』評語研究初探」(大東文化大學『漢學會誌』五十一號・二〇一二年三月)参照。
- (5) 戴廷杰『幽夢影』版刻考論(『文獻』二〇一一年十月・第四期)、前掲合山究譯注『幽夢影』、高旂璐『張潮與《幽夢影》』(萬卷樓圖書股份有限公司・二〇〇四年)、劉和文『張潮研究』(安徽大學出版社・二〇一一年)等。
- (6) 馮保全譯注『新譯幽夢影』(三民出版社・二〇〇〇年)、司馬哲編『幽夢影全書』(國學新讀大講堂・中國文物出版社・二〇〇九年)

等。

- (7) ともに北京圖書館(北海公園古籍館)、天津圖書館、アメリカ國會圖書館等に所藏。乾隆庚子(四十五(一七八〇)年)秋鏤・心齋定本・本館藏版。本論では北京圖書館本を使用する。なお、本論では前掲「張潮『尺牘友聲集』」「尺牘友聲偶存」研究資料編」(大東文化大學『中國學論集』三十號・二〇一二年十二月)に従って通し番號(『友聲』は表2、『偶存』は表3の通し番號)を表記する。
- (8) なお、兩書簡集や張潮の書簡傳達状況の詳細については「張潮の交遊關係について―『尺牘友聲集』及び『尺牘友聲偶存』を手がかりに―」(『漢學會誌』五十二號・二〇一三年三月)、前掲「張潮『尺牘友聲集』」「尺牘友聲偶存」研究資料編」を参照。
- (9) 『香夢影』が『幽夢影』の初名であることは、李金堂編校『余懷全集(上)』(上海古籍出版社・二〇一一年)三六三頁「與張潮其二」編校者注にも言及がある。
- (10) 陳鼎『留溪外傳』卷六
- (11) 『偶存』234「寄復陳定九」(卷六)「……今寄上檀几叢書初集五部・昭代叢書五部・幽夢影四部暨凱旋詩歌、到日乞檢入。……」
- (12) 『偶存』423「復王司直」(卷十)「……幽夢影遵命奉上凡四冊、又……」
- (13) 王概「『友聲』1通、『偶存』3通・王著」「『友聲』2通、『偶存』3通。
- (14) 『偶存』426「復沈契掌」(卷十)「……外又幽夢影遵命奉到三冊、……」
- (15) 『友聲』694(王集)「……幽夢影得再惠一冊爲感」
- (16) 『友聲』661(王集)「……幽夢影梓成、望多寄幾冊。……」
- (17) 『友聲』102(新集卷五)「幽夢影求多擲數冊。……」
- (18) 『偶存』210「復黃仙裳」(卷五)「……承詢近刻、敢以去歲所輯昭代叢書及幽夢影・雜組、又今歲所製凱旋詩、就正有道、尙惟直筆指示、切禱、切禱。……」
- (19) 『偶存』380「復汪栗亭」(卷十)「……外、集篆感應篇一帙、又拙著幽夢影補評一帙、統惟檢入是荷」
- (20) 『偶存』198「與根潔上人」(卷五)「幽夢影四冊、外一冊呈上紅蘭主人。……」
- (21) 詳しくは「張潮と紅蘭主人の交遊―書簡を手がかりに―」(『東洋研究』一九四號・二〇一四年十二月)参照。
- (22) 『偶存』192「再寄朱贊皇」(卷五)「近刻幽夢影、郵呈斧政、幸賜台評。爲荷外一冊、呈上主人。又四冊存尊處。……」
- (23) 『偶存』202「上勤郡王」(卷五)「附有拙刻幽夢影一冊、想已久呈電覽。……」

- (24) 『友聲』999 (新集卷五)「…。尊刻幽夢影、搗之金臺、皆爲友人劫去。目下索者紛紛。…。」
- (25) 『友聲』477 (已集)「幽夢影一書、久爲方符白攜去。渠方日在槐安郡中、喚之不醒。奈何。但吾兄爲夢多端。都化作蝴蝶飛去、使我何處捉拏。若欲得其端倪、不如足下權作杜麗娘尋夢一番。可無煩弟作李少君也。一笑」
- (26) 『抱朴子』內篇・論仙「少君之將去也、武帝夢與之共登嵩高山、半道、有使者乘龍持節、從云中下。云太乙請少君。帝覺、以語左右曰、如我之夢、少君將舍我去矣。數日、而少君稱病死」
- (27) 『偶存』118「與朱菊山索幽夢影」(卷三)「幽夢影久未索還。恐類鄭人隍中之失、敢祈吾兄以捉影之手爲我尋夢、庶華胥一席地猶得復歸原主人也」
- (28) 『幽夢影』18の評語に「尤悔庵曰、第一大願、又曰、願在人而爲夢」とか「尤慧珠曰、我亦有大願、願在夢而爲影」等とある。
- (29) 以上、五名の序・跋は道光本『昭代叢書』(上海古籍出版社影印・一九九〇年)所收の『幽夢影』に見られる。
- (30) 詳しくは、拙論「王暉とその交遊關係について」(大東文化大學『漢學會誌』五十六號・二〇一七年三月)を参照。
- (31) 『偶存』113「寄王丹麓」(卷三)「所懇幽夢影序文、俟發梓時再容拜領耳。…。」
- (32) 『友聲』458 (已集)「…。蒙委幽夢影題詞、弟以筆墨久廢、未敢草率。或俟先生刻成、幸以刻樣見寄、當跋數語。…。」
- (33) 王暉の文集『霞學堂文集』卷三に「幽夢影題辭」有り。
- (34) 『友聲』385 (戊集)「…。香夢影題詞、已經屬草、容即錄出送政。…。」
- (35) 『友聲』386 (戊集)「…。香夢影題詞呈上。率筆抒寫胸中、不自知文辭之工拙也。…。」
- (36) 詳しくは、拙論「余懷と張潮」作者と編者の關係を中心に」(『大東文化大學紀要(人文科學篇)』五十三號・二〇一三年)を参照。
- (37) 『友聲』696 (壬集)「…。再前蒙囑幽夢影作叙、主人已爲首肯。但未見尊稿則措辭無由。幸速寄來、以便其乘輿揮毫可耳。…。」
- (38) 『幽夢影』「予嘗謂二氏不可廢、非襲夫大養濟院之陳言也」
- (39) 『友聲』176 (卷四)「…。然常謂、二氏必不可廢。拙著幽夢影中曾及之。…。」
- (40) 前掲合山宛著書の本文に振られた通し番號による。
- (41) 『友聲』727 (癸集)「…。讀幽夢影一書、其中有格言、有理學、有創解、有幻想、有別見、有奇思、有韻語、有趣論、有異說、有麗情、有經濟、有戲謔、有醒世驚人句。大率顯而非幽、覺而非夢、質而非影也。題名之以幽夢影者、在尊著必有所謂、而鉉則不解何謂也。…。」

- (42) 『金剛般若經』に見られる。
- (43) 『友聲』 103 (新集卷五) 「嘗讀佛氏書謂、一切有爲法、如夢幻泡影。蓋謂影虛而非實也。及讀心齋先生幽夢影、句句皆實學則吾儒所謂影與佛氏所謂影、固自不同。然吾儒中自負於實學者頗多。觀其文字語言、終涉影響、抑又何歟。請以質之心齋先生」
- (44) 『友聲』 382 (戊集) 「前見示雜俎及香夢影二種、字字新異、不捨人牙慧。弟篝燈展誦、惟有咨嗟嘆奇絕、雖欲略加去取、而無從也。……」
- (45) 『友聲』 798 (新集卷一) 「得讀先生幽夢影諸編、快妙無比、……」
- (46) 『友聲』 856 (新集卷二) 「……至幽夢影則風流蘊藉、蒙莊達觀、……」
- (47) 『友聲』 404 (戊集) 「語凡數見則不鮮。今香夢影段段開人心胃、吾歎焚瓣香、共莊子南華讀之、晉人清談、覺無意味、即付剖劂以開瞽瞍望望」
- (48) 『偶存』 380 「復汪栗亭」 (卷十)
- (49) 本論では『幽夢影』のテキストは『昭代叢書』(上海古籍出版社影印・一九八九年)別集本を使用する。
- (50) 「張潮『幽夢影』の評者たち」(『大東文化大學文學部紀要(人文科學編)』五〇號・二〇一二年三月)
- (51) 前掲「張潮『幽夢影』の評者たち」
- (52) 『偶存』 213 (卷五) 「復尤悔菴年伯」 「幽夢影尊評、未蒙頒到。尙祈檢寄。……」
- (53) 『友聲』 722 (癸集) 「茲以便郵勒候福履、并將西堂先生所閱幽夢影、一竝持上。伏望驗收。……」
- (54) 『友聲』 869 (新集卷二) 「至戊寅春、曾具一函。將西堂先生所評尊著幽夢影寄上」
- (55) 『偶存』 284 「與尤慧珠檢討」 (卷七) 「……拙著幽夢影重荷台評、感戴何似。……」
- (56) 『友聲』 711 (壬集) 「其幽夢影并雜俎評語、岳來面奉。……」
- (57) 『偶存』 231 「復尤悔菴年伯」 (卷六) 「初夏、錢十老來、接到老年伯先生大筆幽夢影評語。……」
- (58) これについては、拙論「張潮と王士禛の交遊關係―編集狀況を手がかりに―」(『東洋研究』二二〇號・二〇一八年十二月)を参照。
- (59) 張潮と孔尚任の關係については、前掲「張潮『幽夢影』と評者たち」を参照。
- (60) 『偶存』 184 「寄復孔東塘主政」 (卷五) 「……拙著幽夢影、今年亦欲付梓。前歲託宣城友人袁中江攜入都門、丐諸老先生評語。中江忽作古人、不識此書浮沈何地也。今一而付梓、留木以待補評、尙可增入耳。……」

- (61) 『友聲』915 (新集卷三)「……閒見幽夢影部內諸家評語，尙有空位。妄擬數辭錄之別紙呈。正如有可採，幸存一二。然總聽尊意。恕其僭妄可也。貴宗諧石先生處晤時并乞代致。……」
- (62) 『偶存』356「復沈契掌」(卷九)「……承諭拙著幽夢影，久未刷印。尊評已借光數條，俟印出，自當郵奉台覽也。……」
- (63) 『呂祖本傳』(『呂祖全書』) 乙「鍾離撫掌曰，塵心難滅，仙才難遇，吾之求人，甚於人求吾也。吾見汝心君大定，魔光十現，而皆不爲所折，必成道矣」云々とある。
- (64) 『偶存』77「與余澹心」(卷二)「至幽夢影一編，則乞揮數語，以爲弁無厭之。請不識先生將爲王方平揮鞭以責乎，抑將爲麻姑之漫不介意乎。否則或竟如其所謂如呂祖之所謂吾之求人，甚于人之求吾者乎。僕知先生領袖仙班爲當今呂祖，專以度世爲心，必不惜齒牙餘論。故敢蒙此妄想，唯先生察之。……」
- (65) 『偶存』78「又「與余澹心」」(卷二)「幽夢影承惠弁言，可籍台光以爲重感。……」
- (66) 『友聲』547 (庚集)「幽夢影一書，可以療俗，似屬格言。然却無一毫道學氣，必傳無疑。弟遵命妄評數則原稿。壁上幸照入。弟仍有傳數篇，待到淮，再馳寄」
- (67) 『偶存』164「復江合徵」(卷四)「弟幽夢影一書，自覺頗饒別趣。因友人攜入都門。俟彼寄回，方能授梓。此中頗有吾兄灑頭作料在上，正可稱五侯鯖也」
- (68) 『友聲』503 (己集)「……幽夢影僭評有提挈大意者，有全神領會者，有斷章取義者，有意在言外者。吾兄文心慧眼自能了，此諒不抹去，不敢更爲饒舌也。……」
- (69) 『友聲』519 (己集)「讀先生幽夢影筆記，大是豁人心目，意想超拔出塵，皆再來人夙悟語也。承命妄附數小評，未免有佛頭之誚。原本呈上。……大著中江合徵先生諸評絕佳，乞致傾慕。……」
- (70) 『偶存』192「再寄朱贊皇」(卷五)「又四册存尊處，倘諸老先生有肯着評語者，亦不妨代索之。其辭不須過譽即鄙意相反，或嬉笑怒罵皆無不可也」
- (71) 『偶存』191「復根潔上人」(卷五)「……今寄來幽夢影四册，幸檢入。倘諸公有肯賜評者，不妨代索佳評也」
- (72) 『友聲』636 (辛集)「……承教幽夢影，以精金美玉之談，發天根理窟之妙。小姪旅邸無下酒物，得此數夕酒杯，閒頗饒山珍海錯，何快如之。不揣狂瞽，妄贅瑣言數則。老叔臺進而教之，幸甚，幸甚。……」
- (73) 『友聲』704 (壬集)「昨過擾，謝謝。歸讀幽夢影，一則一叫絕。今于無批語處，僭添數段以附。不朽原本繳上，以便補刻，如以爲太多，或移數語于他良友名下可」

- (74) 前揭「張潮『幽夢影』評語研究初探」參照。
- (75) 『友聲』679(壬集)「……今讀尊著幽夢影、悉本齊照所發、又極雋永微妙、可敵晉人世說、固宋儒所當遜讓者。謹與樸園公書影一編、奉為帳中之祕。來論屬評一二、不敢自外、謬附四則。請政。……」
- (76) 『友聲』877(新集卷二)「……惠教佳刻捧讀竟日。僅了得幽夢影一種、不揣蕪陋閒、綴僭評一二。未知有當高明否。特呈上。望直以教我。感感。……」
- (77) 『友聲』937(新集卷四)「……舍親沈契掌所寄幽夢影、盥手捧讀、不覺心曠神怡、頓開茅塞。誠為大幸。……因不揣卑鄙、僭評數語、欲附驥尾。想先生或不以為厭也。……」
- (78) 『友聲』943(新集卷四)「……幽夢影妄評續貂、或有可錄、擇而取之、則弟亦賴以傳不朽矣。……」